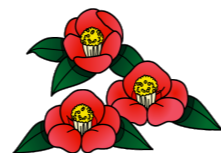


2023年



マナ通信



今月のマナ通信

◎11月の週日の聖書日課 (イザヤ書、エペソ人への手紙、エレミヤ書、他)

◎土曜日・日曜日の学び イスラエル王国の分裂、救い主の預言と成就

からの感想です。

エペソは使徒の時代にアジア州第1の都市であり、ユダヤ人も多く住み、会堂もありました。そして、ここは陸路、海路が集まる中心で、東洋、及び西洋から来た人が行き交う商業都市であったのです。

その為、アルテミス神殿にみられるように偶像礼拝が盛んで、墮落した都市でもありました。パウロは第二回伝道旅行でピシデヤのアンテオケから南に下ってエペソに向かおうとしたが聖霊に禁じられてヨーロッパに向いました。やはり神の導きによる伝道旅行だったのです。

パウロは元より異邦人伝道に力を注ぐように神から召されていて、12弟子のようにユダヤを中心とした伝道とは違っていました。しかし、迫害に遭うたびにユダヤ人はエルサレムを出て地方に散らばっていたのです。これは、福音の伝道のためには良いことなのですが、ここに問題があり、神の選民であるイスラエル人と異邦人との間に争いもあり、律法を重んじるユダヤ人にとっては、異邦人の考え、行動が許せないものであったに違いなかったのです。

だからパウロはローマの獄中から、神の啓示により導かれるままに、エペソの人々に手紙を書いたのです。よってこれは神からのメッセージでありました。

「しかし、かつては遠く離れていたあなたがたも、今ではキリスト・イエスにあって、キリストの血によって近い者となりました。実に、キリストこそ私たちの平和です。キリストは私たち二つのものを一つにし、ご自分の肉において、隔ての壁である敵意を打ち壊し、様々な規定から成る戒めの律法を廃棄されました。こうしてキリストは、この二つをご自分において新しい一人の人に造り上げて平和を実現し、

二つのものを一つのからだとして、十字架によって神と和解させ、敵意を十字架によって滅ぼされました。また、キリストは来て、遠くにいたあなたがたに平和を、また近くにいた人々にも平和を、福音として伝えられました。このキリストを通して、私たち二つのものが、一つの御霊によって御父に近づくことができるのです。こういうわけで、あなたがたは、もはや他国人でも寄留者でもなく、聖徒たちと同じ国の民であり、神の家族なのです。」(エペソ2:13-19)

異邦人は、神に選ばれ、律法を守ってきた人々からすれば、よそ者であり「無割礼」であるため汚れ、神の民から絶たれるべき人々でした。キリストなしには、神の民の特権や、アブラハムの契約の対象ではなく、滅びゆく世に在って望みがなく、信じるべきまことの神を知らなかったのです。

そのように、神の民とはかけ離れた者たちが、今はキリストに在って、近い者とされたのです。それを可能にしたのはキリスト・イエスの血です。律法による救いの道は廃棄され、かつて敵対関係であったユダヤ人と異邦人は、同じキリストの十字架によって「新しい一人の人」にされたのです。

異邦人はキリストによって、まったく異なる立場に移されました。かつては他国民にすぎなかった者が、聖なる神の民と同じ権利を与えられ、同じ「神の家族」となる特権を得たのです。(11月7日、黙想より)

日本に於いては、周りにはユダヤ人はおりませんので、2つのものを一つにして「新しい一人の人」を造り出す苦労はありませんが、教会のあり方は同じだと思えます。教会とは神に召された人の集合体です。だから、教会は一つになっていなければなりません。

そして、キリストのからだである教会を我々1人1人が一器官として受け持ち、キリストのからだを完成させなければなりません。神の臨在の場となり、この世の中で神の栄光を現す存在となるように、教会が一つになって成長していかなくてはなりません。

喜びをもってキリストに対する信仰が深められ、神に栄光を歸し、御心に沿った生活が日々送れますように。(畑中伸之)

エレミヤ24章1-10節の「神殿の前の二籠のいちじく」から教えられたことです。

主の神殿の前に置かれた二つのかご、一つのかごのは、初なりのものである非常に「良いいちじく」、もう一つのかごには、非常に「悪いいちじく」で食べられないものでありました。

「良いいちじく」と言われている民は、エルサレムからバビロンに連れて行かれたユダの捕囚の民、彼らにとっては試練であり悲しみ、苦しみであったと思うのですが、6節で神様は、「わたしは、彼らを幸せにしようと彼らに目をかける。彼らをこの地に帰らせ、建て直して、壊すことなく、植えて、引き抜くことはない。」と語られました。

7節では、「わたしは、わたしが主であることを知る心を彼らに与える。彼らはわたしの民となり、わたしは彼らの神となる。彼らが心のすべてをもってわたしに立ち返るからである。」と、語られます。解説によりますと、ユダの民のバビロン捕囚は、最初から「神様の深いお計らい」でありました。

「悪いいちじく」とは、「自分たちの不信仰と偶像礼拝を悔い改めず、ユダの国の破滅と捕囚となることを受け入れない人々」で、捕囚の後ユダの国を再興しようとしてバビロン王に謀反を起こしました。彼らは、神様の力ではなく、自分たちの力や知恵や策略で、国を再建しようとしたが、その願いは決して実現しませんでした。

捕囚に抵抗した人たちが滅び、神様の裁きとして捕虜に服した人たちは生きて、回復と帰還を約束され、後にそれは「神様の計画」として実現するのです。

神様が人を裁かれる時、ある人は、そこで自滅してしまいます。しかし別の人はその裁きによって新しく生まれ変わります。何が両者を分けるのでしょうか。

それは裁きによる苦しみや失望の中に、神様の深い配慮と計画があるか、考えないかだと思いますと、結ばれていました。思わず、不信仰は罪なのだ自分に語っていました。(福島三弥子)



地が芽を出し・・・神である主が正義と賛美をすべての国の前に芽生えさせるからだ。」(イザヤ61:11)

この御言葉に信頼し、このようになるように、今の世界に見させて下さい。

*「全地は荒れ果てる。ただし私は滅ぼし尽くしはしない。」(エレミヤ4:27)
の御言葉にも、励まされました。

*『天と地を造らなかった神々は地からも、この天の下からも滅びる』(エレミヤ10:11)

きっぱりとしたこの表現にシャキッとさせられました。木造や彫像の偶像はどんなに金ぴかで仰々しくても動くことも、語ることもできないのです。そんな神に私たちを救うことなどできる筈がありません。

私たちの主は目に見えなくてもこの世界全てを創造されたお方です。

16頁にある“目に見えない神に信頼することは、目に見えるものにより頼まない真の勇気を、必要とします”

見えるものに頼らない真の勇気は、とても心に響きました。確かに勇気が要ります。見えるものをあがめないことを、肝に銘じました。(広瀬裕子)

ロイドジョンス著「ロマ書講解5章」の「神を大いに喜ぶ」のタイトルのところで、「神を得意に思い、喜び、大いに喜ぶことができない原因」は、いくつかの理由を述べていますが、私にぴったりと思える原因が書かれていました。

「しかるべきほどには瞑想せず、教理とその数々の含みを学んだり、突き詰めて考えたりすることに十分な時間を費やさないのである。聖書のほんの数節を読み、その箇所^の短い解説に目を通し、短い祈りをささげては、仕事か何かに駆け出してゆく。そそくさと通り一遍に聖書を読むだけでは、ほとんど無益であり、真の喜びには至らない。神を喜ぶことを少しでも知りたければ、こうした事柄の為に時間を割き、瞑想しなければならない。」

まさにその通り、そそくさと読み祈り、家事etc.に駆け出してゆく私です。また、資料などを整理ファイルすることで安心してしまふ面もあります。

「真理を瞑想することで、それに感謝、喜び、それがさらなる真理をもとめさせ、追及から瞑想へ進み、喜びを深めて行くという好循環の中で過ごせたら」いいなと思っています。

この学びをする前から比べたら、喜びは増えたもののファイルすることで安心してしまふことにも警戒し、[・・・]の部分^を、残り少ない人生に増やし、神のみわざを感謝し喜んでゆきたいです。(高橋美枝)



神の聖霊を悲しませてはいけません。あなたがたは、贖いの日のために、聖霊によって証印を押されているのです。」(エペソ4:30)

私たち主を信じた者は、贖いの日のために聖霊によって証印を押されていると、パウロはここではっきりと言います。だからこそ神の聖霊を悲しませてはいけません。

ここは厳しい命令ではなく、悲しませることをしないで、主が喜ばれることをしようじゃないか、という励ましに聞こえます。救いの喜びと感謝が土台です。救いと行ないの順番を間違えないようにしたいです。(永井亮子)

アういうわけで、私は膝をかかめて、天と地にあるすべての家族の、「家族」という呼び名の元である御父の前に祈ります。どうか御父が、その栄光の豊かさにしたがって、内なる人に働く御霊により、力をもってあなたがたを強めてくださいますように。信仰によって、あなたがたの心のうちにキリストを住まわせてくださいますように。そして、愛に根ざし、愛に基礎を置いているあなたがたが、すべての聖徒たちとともに、その広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解する力を持つようになり、人知をはるかに超えたキリストの愛を知ることができますように。そのようにして、神の満ちあふれる豊かさにまで、あなたがたが満たされますように。どうか、私たちのうちに働く御力によって、私たちが願うところ、思うところのすべてをはるかに超えて行うことのできる方に、教会において、またキリスト・イエスにあって、栄光が、世々限りなく、とこしえまでもありますように。アーメン。」(エペソ3:14-21)

私たちが祈ろうとしている相手をどのようなお方として理解しているかは、私たちの祈り方を左右することを教えられました。パウロはここで、5つのことを祈っています。

- (1) 父なる神が、私たちの「内なる人」に働かれる聖霊によって、私たちに強めてくださるように。神の子どもたちにとって最も大切なことは、霊的な健康。「外なる人」である肉体は衰えても、「内

なる人」は日々新たにされるのが健全な歩みであること。

- (2) 父が信仰によって、心のうちにキリストを住まわせてくださいますように。

キリストは、すでに信仰者の心におられますが、信頼関係が深められ、心全体が明け渡され、キリストが家主として自由にふるまうことができ初めて「住んでいる」と言えること。

- (3) 神の愛の大きさを理解することができるように。

信仰者はすでに神の愛を知っていますが、教会の交わりの中で互いに愛し合う経験を通して、神の愛の大きさを観念ではなく体験的に知ること。

- (4) 人知を超えたキリストの愛を知ることができますように。

私たちは自分には愛がないことを知らされると同時に、このような私たちを愛し、ご自身を捨ててくださったキリストの愛を知ること。

- (5) 神の愛を知る結果として、私たちが神の恵みに満たされますように。

神は、私たちが自分自身が空であることに気づき、神の恵みを求める時にのみ、私たちの必要を満たすことができます。「心の貧しい者は幸い」(マタイ5:3)と言われるゆえんであること。

祈りの最後は、^{しやうえい}頌栄(ほめたたえる・ほめうた)で閉じられています。

神は人の思いを超えて、私たちキリストに在る教会のうちに御力を働かせ、ご自身の栄光を現されます。私たちのうちに働く力によって、私が願い、かつ、思うことすべてを、はるかに超えて、それ以上のことを行われることを教えられました。

神様のご計画の深さと広さを思い、感動しました。エペソ3章にすばらしいみことばを目にすることができました。感謝です。(木村邦夫)

どうか、私たちの主イエス・キリストの神、栄光の父が、神を知るための知恵と啓示の御霊を、あなたがたに与えてくださいますように。」(エペソ1:17)

コロナ禍にあった2022年も、あとわずかです。あともうすぐ終わろうとしています。「一日一日、主に在って歩むことが出来たでしょうか。」と、我が身を振り返ります。

しかし、私たちがいかなる状態でも、いつも主なる神は共にいてくださいます。心の目がはっきり見えるようになって、より深く主なる神を知ることができますように祈り求めます。(外處トミ)

主の愛に 包まれ守られ 歩む時
不安 悩みは 去りて安らぐ

2022年11月30日



埼玉県神川町にある城峯公園の冬桜

悪い言葉をいっさい、あなたがたの口から出してはいけません。必要があれば、人の徳を高めるのに役立つような言葉を語って、聞いている人の益になるようにしなさい。神の聖霊を悲しませてはいけません。あなたがたは、あがないの日のために、聖霊の証印を受けたのである」(エペソ4:29、30)

いっさい、と言われていました。悪いを言葉をなるべく、ではなく。簡単な言葉で書かれています。簡単に実行できることではないと思います。

私たちに自我があり感情があり、自尊心があるからです。しかし、誰よりも偉大で力のある神様は決して感情的にならず、常に私たちのために思っていてくださいます。神様の御心にかなう毎を送りたいです。(外處光歩)

その教えとは、あなたがたの以前の生活について言えば、人を欺く情欲によって腐敗していく古い人を、あなたがたが脱ぎ捨てること、また、あなたがたが霊と心において新しくされ続け、真理に基づく義と聖をもって、神にかたどり造られた新しい人を着ることでした。ですから、あなたがたは偽りを捨て、それぞれ隣人に対して真実を語りなさい。私たちは互いに、からだの一部分なのです。」(エペソ4:22-25)

私のうちに住んでおられる神の御霊を悲しませることがないように、ことばに気をつけ、必要なときに、時にかなうことばを語る者でありたいです。

新しい人を着るために、まず古い人を脱ぎ捨てることができますように。すべてを主にゆだねて、主に喜ばれる日々を歩んでいけたら幸いです。(外處結実)

どうか、私たちの主イエス・キリストの神、栄光の父が、神を知るための知恵と啓示の御霊を、あなたがたに与えてくださいますように。また、あなたがたの心の目がはっきり見えるようになって、神の召しにより与えられる望みがどのようなものか、聖徒たちが受け継ぐものがどれほど栄光に富んだものか、また、神の大能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力が、どれほど偉大なものであるかを、知ることができますように。」(エペソ1:18,19)

この御言葉は、今の私の切なる願いを全て表しています。そのとおりです。主の啓示をいただかなくては、そして、主に心の目を見るようにしていただかなければ、何の力も恵みの喜びも得られない信仰生活なのです。

それでは、ただ試練が訪れるのを恐れ続ける日々になってしまいます。ただ待ち望むだけでは何十年経っても得ることはできません。

もっと強い願いを持って捜し求める必要を覚えます。「わたしは、愛する者をしかったり、懲らしめたりする。だから、熱心になって、悔い改めなさい。」(黙示録3:19)(外處徳昭)



しかし、あわれみ豊かな神は、私たちが愛してくださったその大きな愛のゆえに、背きの中に死んでいた私たちを、キリストとともに生かしてくださいました。あなたがたが救われたのは恵みによるのです。神はまた、キリスト・イエスにあって、私たちがともによみがえらせ、ともに天上に座らせてくださいました。」(エペソ2:4-6)

「しかし、…神は」は、別の主題に移ることを示す言葉です。この言葉は、ある途方もない変化が起こったことを示しています。死の谷の滅びと絶望が、神の御子の愛の王国で味わう驚くべき喜びに変わるのです。

このお方の1つの特徴は、「あわれみ豊かな」お方であるということです。神様は、「私たちの罪にしたがって私たちを扱う」ことをしないことによって(詩篇103:10)、私たちに「あわれみ」を示されます。

神様は、6千年にわたって、「あわれみ」を示してこられました。無数の人々がその「あわれみ」にあずかってきました。私もその1人です。

神様が間に入ってくださった理由が、「私たちが愛してくださったその大きな愛のゆえに」という言葉で示されています。神の愛が「大きな愛」であるのは、神様がその源だからです。

偉大な人物が誰かに贈り物をする、その贈り物にも、どことなく偉大さを感じさせるものがありますが、それと同様に、神様があまりにもすぐれたお方であるがゆえに、その愛もまた、この上なく輝かしいものなのです。

例えば、自分と同じ人間に愛されることよりも、力ある「全宇宙の支配者」に愛されることの方が、はるかにすばらしいことです。神の愛は、神様が払ってくださった犠牲のゆえに大きいのです。

愛が、神のひとり子である主イエスを遣わしました。主は、私たちのためにカルバリで苦しみもだえて死んでくださいました。神の愛は、その対象に注がれる計り知れない富のゆえに偉大なのです。

また、神の愛が偉大なのは、愛された者たちが全く価値のない者たちだったことです。私たちは「背きの中に死んでいた者」であり、神の敵でもありました。それにもかかわらず、神様は私たちが愛してくださったのです。

神様が私たちが愛してくださり、キリストが贖いのみわざを成し遂げられた結果、私たちは、
①キリストとともに生かされ、②キリストとともによみがえらせ、③ともに天上に座らされたのです。

これらの表現は、私たちが主と1つにされた結果もたらされた、私たちの霊的な立場を述べたものです。

主は私たちの代表者として行動されました。私たちに代わって行動されただけでなく、私たち自身としても行動されました。

したがって、主が死なれた時、私たちも死んだのです。主が葬られた時、私たちも葬られたのです。主が生かされ、よみがえらせ、天上に座らせられた時、私たちもそのようにされました。

私たちは、主と結ばれているので、いけにえとなられた主のみわざの恩恵をすべて享受することができます。何と感謝なことでしょう。

このことに驚いたパウロは、一連の考えを中断して、「あなたがたが救われたのは恵みによるのです」と感嘆の叫びを上げています。

神様は、神のみ怒りに値する者たちに計り知れない恩恵を示されたのですが、パウロはそのことに圧倒されたのです。それこそが「恵み」なのです。

「あわれみ」は、「私たちが受けるべき刑罰を受けない」という意味です。また、「恵み」は、「私たちが受けるに値しない救いを受ける」という意味です。それは努力して得るものではなく、賜物として受け取るものです。

神様はこの恵みを、だれかに強いられて与えてくださったわけでもありません。それは自由意志から出た愛の実践であって、神様にそのような義務があるわけでもありませんでした。何とありがたいことでしょう。神のあわれみと恵みに大感謝です。(福島勲)

貴重なご感想をありがとうございました。
次回はマナ12月号の感想を1月10日までに福島兄弟へお寄せ下さい。(畑中)

